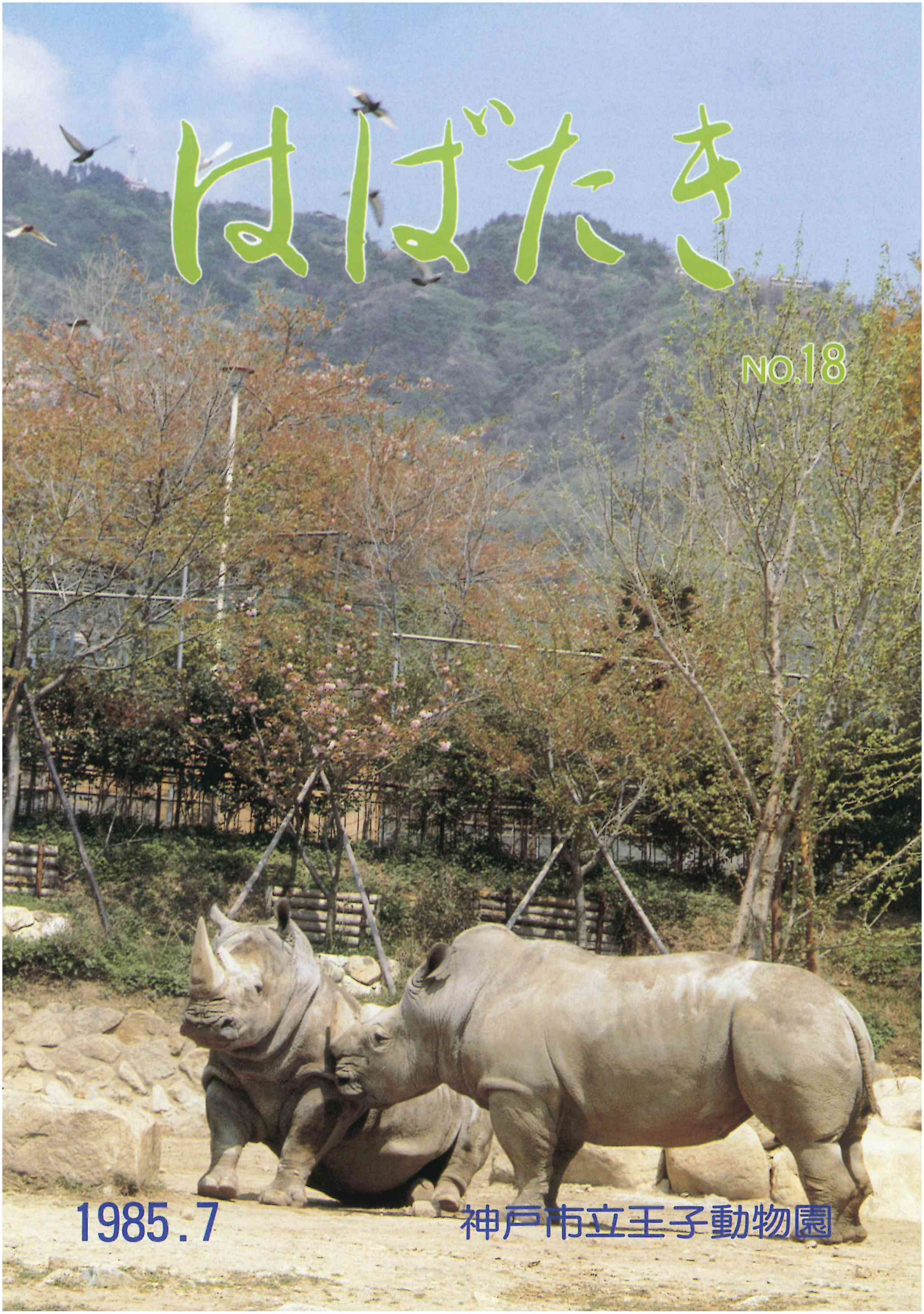


はばたき

NO.18

1985.7

神戸市立王子動物園

最近の話題

今年の５月に日動水の総会が福岡市で催され、全国から参加した園館長の間で２日にわたっていろいろな問題について討議や提言がなされました。その中でとくに興味深かったものを紹介いたします。

その１、“珍獣奇鳥歓迎思考の廃絶” パンダに始まり、コアラ、エリマキトカゲ、ラッコ、ウーパールーパーなど珍獣奇鳥ブームが日本列島を吹抜けて行きましたが、その蔭にはいろいろ反省すべき問題が残されました。国際的な動物の会議では名差しで非難を浴び、そのために関係当局は大あわてでワシントン条約の国内法を一部改正してお茶を濁しました。もともと野生動物の原産地であった国々においては、さまざまな事情により動物の生息条件の悪化やワシントン条約による保護施策の浸透によるなど、益々動物の輸入については珍獣奇鳥ばかりか、あらゆる動物の輸入についても困難な時代になってまいりました。幸い現在国内で飼育されている稀少動物を中心に「種」の保存と一歩進めての共同繁殖をこの際より真剣に考える時であり、動物園・水族館にとって緊急かつ最重要使命ではないかとの提言があり、多くの賛同を得ました。一昔前までは、キリン、サイ、ゴリラの飼育は非常に難かしく、飼育下でそれらの繁殖群を造ることなどは夢の様な話でありましたが、多くの先輩が永年営々と努力と研究を積みあげた成果として今やこれら動物は多くの園で飼育されるまでになり、繁殖するようにもなりました。しかし、一口に共同繁殖といってもこれを軌道に乗せるまでには、まだまだ多くの時間といろいろな討議が必要であります。

その２、コアラの国オーストラリア連邦政府は、自国産の動物を輸出するに当っては、かなり厳しく規制しておりますが、その中で新しい発想として、認定動物園システム（Approved Zoo System）というのがあります。オーストラリア産の動物の受け入れを希望する動物園に対して、その施設が受け入れに対して適確か不適確かを審査するためにいろいろな点で基準を定めたもので、これにパスした施設のみを認定動物園として輸出を許可するシステムです。オーストラリアの動物輸出については、多分に政治的、通商的な色彩が強かったものがこのシステムにより幾らか正される点で喜ばしいのですが、私立の園館等の切りつめた規模、経費の中で地域教育の一端を担って精励されておられるところでは、新しい動物の輸入に際しての厳しい規制になり、両手を上げて歓迎も出来ない面もあります。しかし、動物園の施設や運営の向上には少なくとも役立つシステムではないかと思われます。

神戸市立王子動物園長　福岡　順三

もくじ

◆最近の話題……2
◆兵庫県傷病野生鳥獣救急指定病院……3
◆動物育児日記
　●果下馬の赤ちゃん誕生……6
　●タヌキの人工哺育……7
◆動物の親子……8
◆飼育うらばなし
　●タンチョウの子別れ……10
　●薬をどうぞ……11
◆動物なぜなぜ問答……12
　●あれ！ペンギンがふくれている
　●なんでうんこを投げるんですか
◆動物もの知り手帳……13
　●目のお話その３
◆トピックス……14
◆うら表紙
　●川西先生の版画

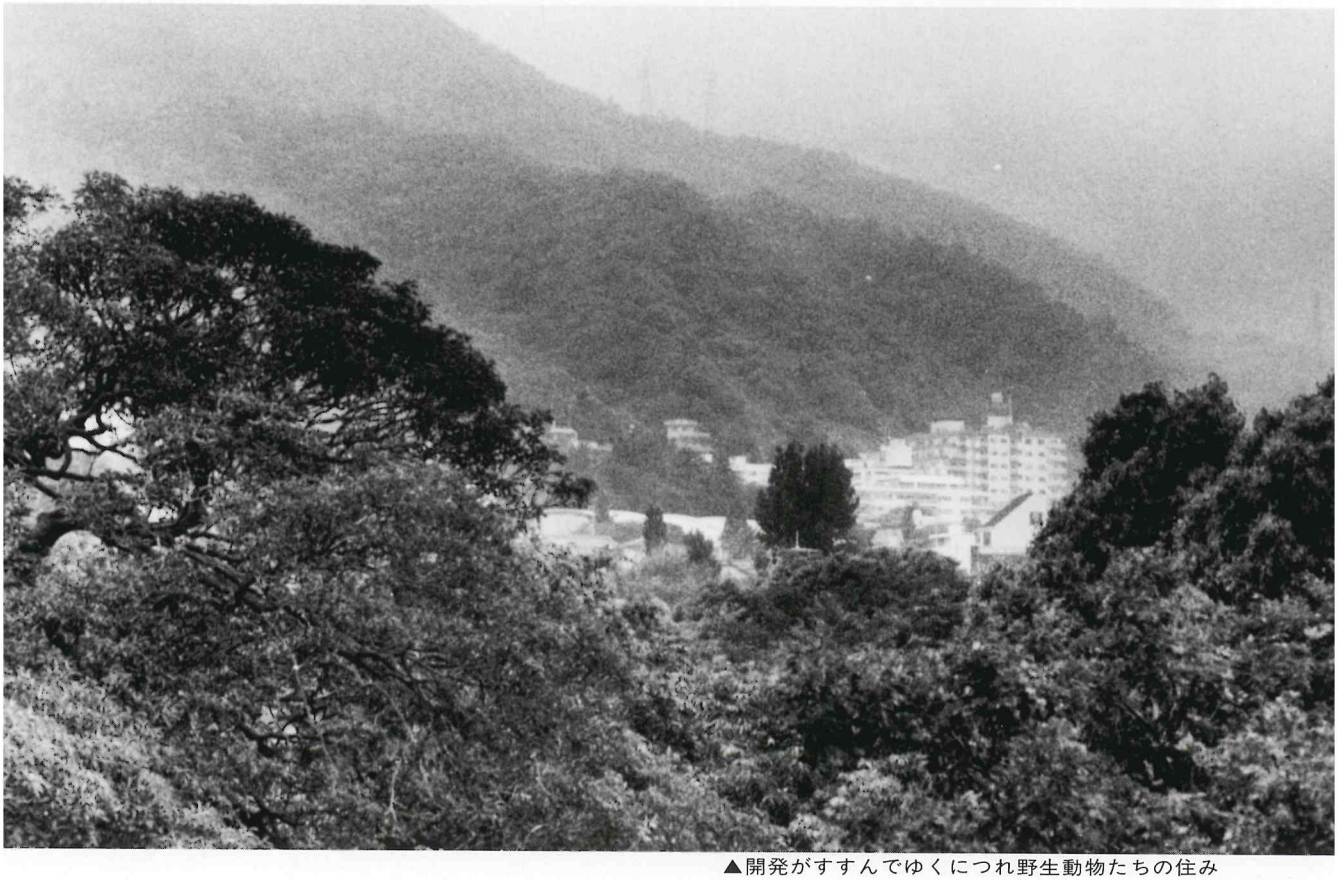
表紙写真　シロサイ
（撮影　福田元二）

「兵庫県傷病野生鳥獣救急指定病院制度」

兵庫県は今年の５月１日付で「傷病野生鳥獣救急指定病院」の制度を実施しました。これは傷ついた野生動物を救うため、県内にある20の動物病院を救急治療と看護の施設として指定するというものです。全国的にはすでに滋賀県や大阪府に同様の制度があり，検討段階にある自治体も多いようです。それだけ傷つく野生鳥獣が増加してきたということでしょうか。ちなみに昭和54年に比し59年度の兵庫県内における傷病、へい死鳥獣の数は届け出だけでも約７倍に増えているそうです。

野生動物の保護に関する法律としては「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」という大正７年に制定されたものがあり、これによって現在まで保護行政がすすめられています。しかしながらこの法律はその名の示すとおり狩猟という概念がその根本にあり、本質的に野生動物保護を目的としたものではありません。このため各自治体では傷病動物の保護という問題に対し、独自で制度や要綱を作る必要があったわけです。

都市近郊の山野、海、河川などの自然は住宅や工場用地として開発され、環境が汚染されてここに従来から住んでいた野生動物は移動もしくは繁殖率の低下などで数を減らしてきています。また、人間が彼等の住み場所に侵入していったことにより、かつては姿を容易に見せるこ



▲開発がすすんでゆくにつれ野生動物たちの住み場所がせまくなってゆきます。

とのなかった動物達が極めて身近にながめられるようになった場合もあります。芦屋ロックガーデンのイノシシの場合などがその好例でしょう。野生動物と親しむという意味ではよかったかもしれません。しかし、反面人間との接触が多くなったために野生動物の事故が増え、これがまた数の減少の原因となっていることも事実です。

交通事故、架線による傷害、犬や猫による外傷、人間のいたずらによるケガなどで保護される野生鳥獣は動物園でも年々増加しています。

開発のツケが回ってきたとも言えます。これに対処するのは開発した側の人間の義務であると思います。そういう意味では兵庫県のこの制度はすぐれたものと言えるでしょう。

しかし今後増え続けるであろう傷病野生動物に対して今回の制度だけでは十分に対応し切れるものではありません。

具体的な将来に向けての提案としては、まず「野生鳥獣保護センター」のような施設の建設が考えられます。ここで専門の獣医師や飼育員が野生復帰まで動物の治療や看護を行うのです。精神的に過敏な野鳥や幼獣には特製のケージがあり、羽や足をなくして野生への復帰が不可能な動物には安心して保養できる広いスペースが確保されるのです。

また減少する野生動物の人工増殖を図るために研究所を設け人工授精や人工フ化などの試みも行ったらどうでしょうか。自然への接し方を忘れつつある都会人のために啓蒙の場として展示資料館も併設すればよいでしょう。

その環境に適正な動物数を維持するために、狩猟を目的としない野生動物管理（マネージメント）の研究も大切です。このために野生保護官のような制度が必要かもしれません。

そしてなによりも市民や県民の力による現存の自然の保護・育成を強力にすすめていかなければならないと思います。

そういう観点からすれば、今回の制度は私達がよりよいものへ高めていくべき野生保護行政の第一歩だと言えるでしょう。　（村田浩一）

保護された野鳥たち。
人間に何か問いかけるような眼をしていませんか？

動物育児日記

◈果下馬の赤ちゃん誕生

昭和59年12月５日中国の天津市より、友好動物として、果下馬が贈られてきました。

雄〔チイチイ〕雌〔シャンシャン〕です。大変小さい馬で、日本には王子動物園にしかいない貴重な馬です。果下馬の名前の由来は、果樹園などで、この馬に乗ったまま、果物の木の下をくぐりぬけることから果下馬と付けたそうです。また在来馬のトカラ馬の先祖ともいわれています。２月22日早朝果下馬の可愛いい雄の赤ちゃんが誕生しました。名前はファーファーと付けられ、体重17kg体高66cm体長48cmです。私たちがかけつけた時にはすでに立ち上り乳も飲んでいました。すぐに雄馬と別居させ分離飼育にしました。そうしなければ狭い獣舎なので雄に攻撃される危険があるからです。又母親が神経質になっており少しでもおちつかせるためです。馬の妊娠期間は約330日で長いと思われますが、草食動物は外敵から身を守るために胎児でいる期間が長く生まれる時にはほとんど完全な状態で出産されます。生後一ケ月を過ぎると、母親と同じ餌も食べるようになりそのころからいたずらもひどく母親の背中に乗ったり獣舎を走りまわったりしています。３月中旬からいよいよ３頭を同居させることにしました。子馬も体重40kgと大きくなったからです。母親は神経質になり子馬が少しでも父親に近づこうとするとあわてて子馬を押して父親から離そうとして守ります。父親が母親に近づこうとすると母親が、後足でけりつけ逃げまどうばかりです。その頃から父親としての権限もなくなり餌を与えても母親から食べるようになりました。普段は父親のほうが強いんですが、母親が子馬を守ろうとする愛情には父親もかてないようです。この子馬がりっぱな大人になるようにみなさんで見守って上げてください。

（関　和也）

◈タヌキの人工哺育

ホンドタヌキの子供が、今元気に育っています。

こんなに大きく育ったのは、当園では初めてのことです。

昭和60年２月16日、朝、いつものように小獣舎へ行くと「キュンキュン。」という子供のなき声が聞こえていました。

「あ、何か生まれている！」
キツネやアライグマなどの部屋が並んでいるので「どれが生んだんだろう」と探してみると、タヌキの腹の下で黒っぽい子供が動いていました。よく見ると、まだぬれているようなので、生まれてからあまり時間がたっていないようです。

実は昨年もこうして子供が生まれたのですが親が育てようとしなかったので、人工哺育を試みたのですが、残念ながら死んでしまいました。

そして今回、「今度こそ、親が育ててくれるように」と見守っていたのですが、やはり昨年のようにお乳をやらずに、子供もびしょびしょにぬれて、このままではまた死なせてしまうことになるので、人工哺育することに決まりました。

親からとりあげた子供は全部で６頭。

そのうちの１頭はすでに死亡していて、どうも死産だったようです。あとの５頭も体温が下がり、もう声もだせないほどに弱っていましたが、ぬれた体をタオルで拭いてやり、ドライヤーをあて、人間の体温で温めていると、少し動きだして元気が出てきました。そこで、注射器に細いゴム管をつけてブドウ糖液を飲ませ夕方からは犬用のミルクを、やはり注射器で与えたのですが、体重約100ｇで人の掌にのるほどの大きさしかありませんので、少しでもミルクを早く送ると気管に入り危険なので大へん緊張する作業でした。

次の日からは犬用の哺乳瓶で、口をむりやりあけて乳首を入れて飲ませていましたがそのうち馴れてくると自力で吸えるようになりひと安心です。それにしても一度に５頭ものタヌキの赤ちゃんの世話をすることになったため見分けるだけでも大へんです。そこでホワイトマーカーで体にマークをつけてそのマークの位置が呼び名になりました。頭にマークのついたのがア(メス)、右耳がミ(メス)、左耳がヒ(メス)、背中がセ(オス)、尾っぽがオ（オス）という具合です。

授乳時間は、朝６時頃、９時頃、12時頃、昼３時頃、５時頃、夜10時頃と一日に６回ですがその時は、ア、ミ、ヒ、セ、オの５頭が我れ先にと競うのでまるで修羅場のようです。
でも満腹になると、すぐに眠ってしまいます。５頭がおりかさなって眠っている姿はとてもかわいいもので、このまま無事に大きくなってくれるよう願っていたのですが、その後残念なことに、３頭が死亡して、アとヒの２頭だけになってしまいました。

現在は離乳して、動物病院の人工哺育室から小猿舎東隣りの獣舎に移り元気に走りまわっています。

（藤井頼久）

◀シフゾウ

▲ショウジョウ

◀アメリカクロクマ

動物の親

（撮影：福田元二）

◀タヌキ

▲フラミンゴ

飼育うらばなし

◈タンチョウの子別れ

タンチョウの「ひな」にとって、いつまでも、親鳥にあまえて暮してはいられません。

かならず一生に一度は体験しなくてはならない、親鳥との別れ、子別れと言う、悲しい時期があります。

野生での子別れ

「ひな」は、自(みずか)ら親元から出て行くのではなく、親鳥の縁切り行動、つまり追いはらい行動が始まります。

それも最初は、さほどにひどくないために、「ひな」もなんとか連れ添って生活をしています。

ところが、10ケ月を過ぎた頃より、親鳥が一変して、攻撃しだすのです。

それも「ひな」に傷をつけることはしません。

「ひな」は、親鳥に接近すると執拗に追い返され、それを繰り返し、繰り返ししている内に、「ひな」は親鳥に対する、頼る心理が抑えられ独立心が生じて、一般にいう、巣立ち、をするといわれています。

動物園での子別れ

野生の生態系とは異なり、限られた檻の中で生活していると、ちょっとした親鳥の異変にも「ひな鳥」は、敏感になります。

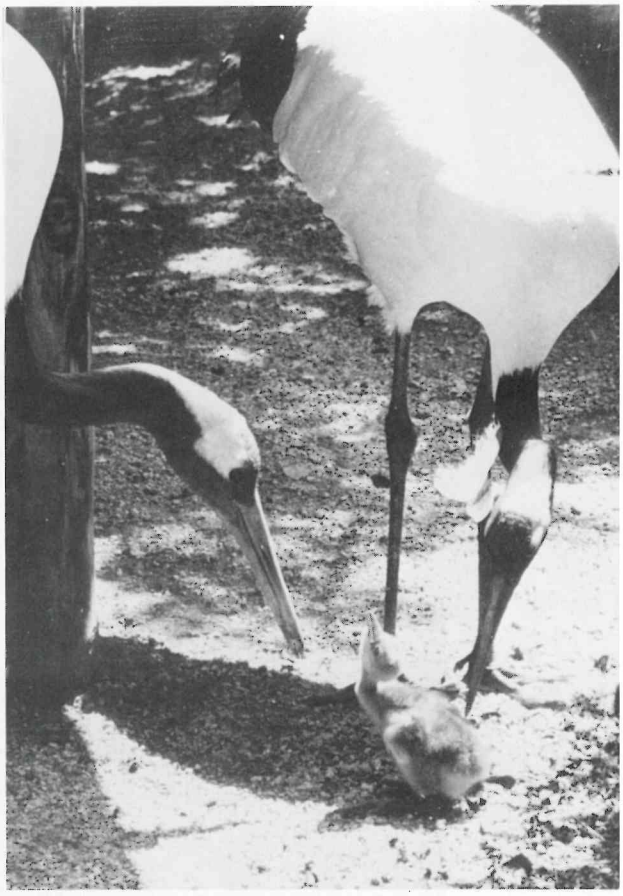
タンチョウの「ひな」ではなかったのですが、オオヅルの「ひな」が、一夜にして、親鳥に追い回され、つつかれ、数年前に死んでしまった痛ましい事故が起きたことがあります。

そこでタンチョウの「ひな」も、親鳥が「ひな」に対して排反行動が起きない前に、適当な時期を見て分離することにしたのです。

その際、数人の飼育係で、檻の中に入り、親鳥をまず捕えます。

そのすきに「ひな」鳥をすばやく捕えるのです。

移す場所は、親鳥がまったく見えない場所がよく、見えると、「ひな」鳥は、終日ピィー、ピィーと鳴き続け金網で、胸や、首に擦過傷をおい、落ち着く日数も、遅れてしまいます。



そこで一番よい方法としては、仕切金網にヨシズを張ってしまい、親鳥を見えない状態にするのが落ちつきを早くすることがわかりました。

一方別れた親鳥の方はどうでしょう。

分離したその日は、ショックで、まったく、餌は食べません。

しかし、翌日は、なにもなかったような顔つきで餌をついばんでいます。

見ていると、親鳥の落ち着きの方が早いようです。

このように、「ひな」を分離する時期、状態

は飼育係の観察力がだいじで、その判断により、子別れさせ、「ひな」は安心して、無事に巣立ちしていくのです。一方親鳥も、来春の繁殖の準備をするのです。　（鈴木　忠）

◈薬をどうぞ

病気の時に薬を飲んでもらうため、人間のお医者さんなら「1日3回、忘れずに飲んで下さいよ。」などと言って患者さんに薬の入った袋を渡せます。でも動物の場合はそう簡単にはいきません。「薬だよ」とそのまま口元にもっていってすぐに飲んでくれる動物はほとんどいないのですから……。

野生動物はまず変な臭いや味に警戒の態度を示します。頭のよい象やオランウータンなどは薬を持った飼育係のいつもと違う様子をすぐに察知してしまいます。ネコ科の動物はちょっとなめておかしな味がすると数日間餌を食べてくれないことがあります。

そこで動物と飼育係の知恵くらべが始まるのです。まず第一の作戦は餌の中に薬を混ぜることです。肉や魚に切口を入れてその中に薬をしのばせます。サルには大好物のバナナを使います。これが失敗した時には第二の方法として甘い味付をしてみます。シロップや黒砂糖に混ぜてあげるのです。人間の子供用の薬にはジュースのような味のものがありますが、このような薬ならばチンパンジーなどはもっともっととうるさく催促するほどです。象にもこの味付法を使いますが、気を付けなければいけないのは決して象の目の前で餌や水の中に薬を入れないことです。遠く離れた場所で混ぜ、いつもと変らぬ調子で「さあ餌だよ」と言ってあげる、これがコツです。

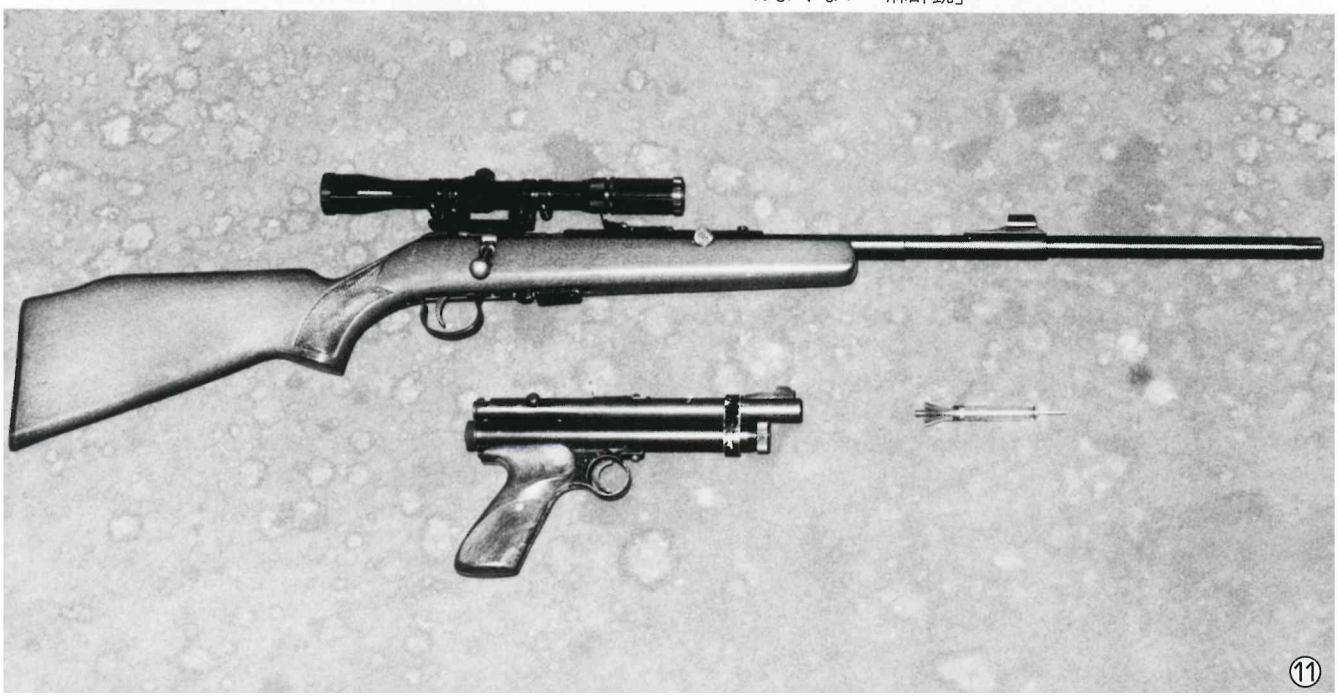
それでもだめな場合は注射器の登場となります。しかし野生動物は犬や猫のように診察台の上で注射が終るまでじっとしていてはくれません。そうかといって、つかまえ抑えつけるのは反対に病気を悪化させることにもなりかねないのです。そこで特殊な注射器を麻酔銃や吹矢を使って遠くから飛ばし、動物の体に当てて薬をうつ方法をよく用います。これが第三番目です。でも来園者がいる時にはまるで動物をいじめているように見られ、あまり評判はよくありません。

その他に水鉄砲のようなもので口元に薬を飛ばしてみたり、長い柄の先に注射器をつけてヤリのようにさしたり、動物に合わせて色々な方法を考えねばなりません。

早く治って欲しいという飼育係の気持ちが、病気の動物に伝わらないのはつらいことです。いつの日か動物と会話のできる機械が発明されたなら、まず「薬をどうぞ。」という言葉を入れてみたいと治療をしながら思っています。

（村田浩一）

▼見ているお客さんにも動物たちにもあまり評判のよくない「麻酔銃」



―動物なぜなぜ問答―

◈あれ！　ペンギンがふくれている！

どうしたことかペンギンの羽がぬけ落ち、じーと動きません。

「かわいそうに病気らしいよ……」

本当にそう思っていらっしゃる人たちの多いことにがっかりです。

あのエンビ服、一生、着たきりのように思っていらっしゃるお方失礼ですぞ！

ペンギンたちは一年に一度はきちんと新調のエンビ服に着がえています。

つまり、イヌやネコのように毛替え、いや鳥たちは、“換羽（かんう）”といって毎年４～６月頃新しい羽が生えてくるのです。

新しい羽が古い羽の根元から生えだすと、古い羽は押しだされるようにぬけ落ちます。

その間２週間は泳ぐことができないので、何も食べずにじーとがまんしています。

このようにペンギンたちは一度に生えかわるので“換羽”がよくわかりますが、他の鳥たちは１～２カ月もかかって換羽するのであまり目だたないわけです。

それにあれだけの羽が一度に生えてくるとなれば、たいへんな栄養が必要となってきますね。それで“換羽”前のペンギンたちの食欲はすごいものでびっくりさせられます。

でもその食欲が突然なくなると、体中がふくれだし、いよいよ“換羽”です。　（亀井一成）

◈何でウンコ投げるんですか？

オランウータン「あんた、なんでそんなにいきってウンコ投げとん……？」

チンパンジー「なんか……こう、ムシャクシャするねん。」

オラン「ふうーん。」

チンパン「むかし俺に石投げてきよった奴おるんや。日曜日なんかは、お菓子や果物がぎょうさん飛んできよるし。」

オラン「ほんまやねェ。」

チンパン「それに、たくさんの知らん人間が、俺を見てワイワイさわぎよるしな――。」

オラン「しんどいねェ、あれは。」

チンパン「ウンコやお菓子投げ返したらキャー・キャーゆうて逃げよるねん。スーとしておもろいで。」

オラン「……」

チンパン「言葉が通じたら、ゆうてやりたいことが一杯あるんや。俺……ストレスたまっとるんやろか。」

オラン「あんたも、たいへんやねェ。」　（村田浩一）

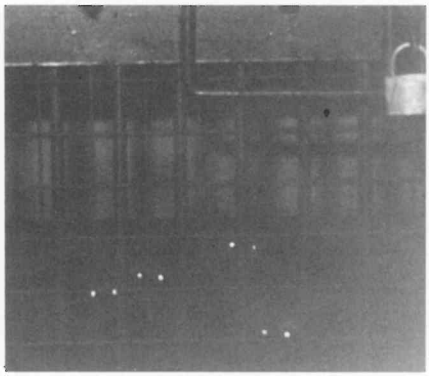
動物もの知り手帳

～なんでも知っちゃお！～

目のお話しその３「光る目」

夜の動物園。皆さんはめったに見ることができません。暗やみの世界にオオカミの遠ぼえ、ライオンのほえ声がひびきます。夜の見回りに出かける私達飼育係の出会うのは寝室からこちらをうかがう光る目です。

今夜はもう寝ているかな、とシベリアトラの寝部屋に懐中電灯を向けると、うす緑色に輝やく大きな瞳がこちらに向いています。よしよし、もう寝ろよ！と声をかけ、次の小獣舎に向かいます。タヌキやアライグマは緑色、キツネやジャッカルは黄色に輝やく瞳で、ジーとこちらの様子をうかがっています。中型猛獣はどうでしょう。オセロットは金色に輝く瞳をみ開らいて愛くるしく小首をかしげています。カラカルは目をしょぼつかせて、ねむいのにじゃまをしないでよ！と言っているようです。

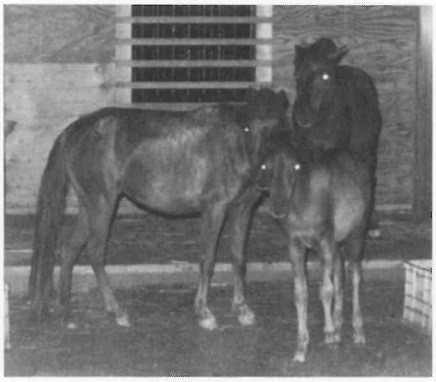


タヌキの目

北園の草食動物はどうでしょう。ほとんどの動物が立ったまま足音とライトが近づいて来る方に顔を向けています。ロバは緑色に光る瞳、ラマやトカラウマは赤く光る瞳で私をむかえてくれます。カバは夜でも水の中、眼と鼻だけ水面に出していますが、赤く光る小さな瞳が出向かえてくれます。

このように夜の動物園はさまざまな色の光る瞳にお目にかかることができます。

皆さんも夜に自動車に乗っているとき、道を横切る目をみたことがあるでしょう。これはイヌやネコの目だということを知っていますね。瞳が光るということは懐中電灯の光や車のライトが眼にあたって、眼球の一番奥にある構造物に光を反射させる働きがあるので、ここにあたった光を私達は見て、瞳が光っているように見えるのです。



果下馬の目

さて、少々むつかしい話になりますが、このことを説明しましょう。

眼球の一番奥に網膜があり、ここにある視細胞が光や色を感じていることは知っていますね。この後に暗室にあるような黒色の膜があります。ここにレンズから入って来た映像を映し出しているのです。しかし光る目を持った動物はこの黒い膜がうすくて光が通りぬけるようになっています。この黒い膜（色素上皮層）の後に私達人間にない壁紙（タペタム）というものがあります。実はこの壁紙が光を反射させる秘密なのです。この壁紙はウシやウマは繊維質でできていますが、イヌやネコは小さな細胞がたくさん集まってできている細胞質のものなのです。

ネコの壁紙の中にはシスチンというアミノ酸と結びついた大量の亜鉛が含まれていることがわかっています。ですから、よく光るネコやイヌの壁紙はちょうど金属の板に光をあてると強く反射するのと同じ理由なのです。

オセロットの目

眼に入った光は網膜を通りすぎて壁紙に反射され、もう一度網膜に感じさせるので、このような壁紙を持つ動物の眼は少しの光でもよく感じることができますし、又光を感じる視細胞が私達人間よりも多いので、暗い夜でも自由に活動することができるのです。

皆さんに夜の動物園をお見せできないのは大変残念ですが、夏休みのキャンプなど、野外生活をされるときは気をつけて観察してみましょう。

ひょっとするとキツネやタヌキの光る瞳に出会う楽しみがあるかも知れませんね。　（権藤眞禎）

トピックス（60年２月～60年６月）

◈ベビーラッシュ（2月～5月）

今年も動物園で多くの動物の赤ちゃんが誕生し、にぎわいました。

カバ（２月28日）、カカバ（２月22日）、フラミンゴ（３月～５月）、タヌキ（２月16日）、シフゾウ（５月17日）。

◈トラの「猛男」永眠（3月2日）

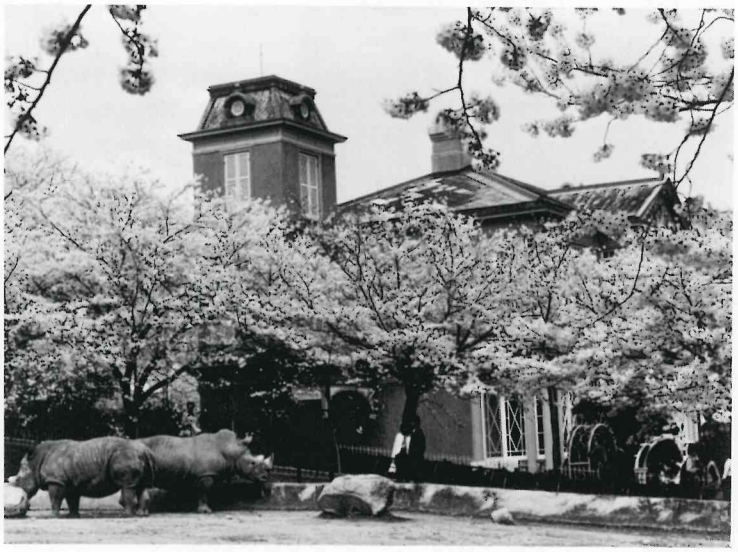
当園で長年飼育されていた、ベンガルトラの「猛男」が、３月２日午前７時10分に老衰のため永眠しました。年齢は18歳、人間の年に換算すると80歳くらいで、昭和43年に妻の「シマ子」と来園、47年～57年までの10年間には、30頭の子供をもうけました。「猛男」は、大へん温厚で、派手さはありませんでしたが、動物園の陰の人気者で、子供たちに大変人気がありました。

◈こうべの動植物園パネル展開催（4月15日～22日）

北野のラインの館で、神戸市の５施設（王子動物園、六甲山牧場、森林植物園、須磨離宮公園、須磨水族館）が、共同で、パネル展を行いました。入館者の興味を誘い、成功のうちに終了しました。

◈「旧ハンター住宅」春の内部公開実施（4月1日～30日）

園内にある、国指定重要文化財「旧ハンター住宅」の内部公開を４月１日から１ケ月間行い、入館者の好評を得ました。



◈春の日曜映画教室実施（4月1日～5月31日）

恒例の日曜映画教室を、４月～５月までの毎週日曜日に行いました。今回の上映は、「カバが笑った」と「ニホンザル母の愛」で、参加者に好評を得ました。

◈金絲猴の借受展示協議書調印（5月2日）

今年の７月に開催されるグリーンエキスポ'85に展示予定の金絲猴を中国より借り受けるための調印が、５月２日、天津市和平賓館で、王芙天津園林管理局長と中井神戸市土木局長とで、かわされました。

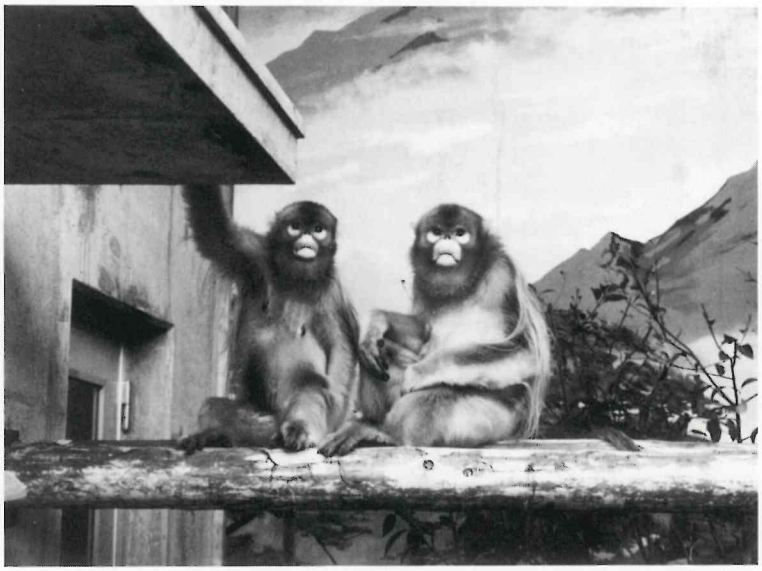
◈カカバの親子を計る会開催（6月2日）

計量記念日にちなみ、恒例の動物を計る会が当園と神戸市計量検査所の共催で、６月２日に行われました。今年は、カカバの親子で３頭の合計体重を当てるクイズがありました。計量の結果、オスの「チイチイ」135 kg、メスの「シャンシャン」119 kg、子馬の「ファファ」51kg、合計 305kgで、3,069人の応募者があり、正解者は19人でした。

（槇原忠史）

◈你好（ニーハオ）！「金金（チンチン）」と「菲菲（フェイフェイ）」です。よろしく

７月21日から開かれます「コウベ　グリーンエキスポ'85」に親善使節として、中国・天津動物園から招いた珍貴動物の金絲猴（キンシコウ）の「金金」と「菲菲」が７月12日の夕方、日航機で大阪空港に到着、直ちに会場の金絲猴館に運ばれ、新居に落ちつきました。長い旅にもかかわらず、大へん元気で、着くなり好物のモモやリンゴを３個も食べました。２頭はお互いに毛づくろいをしたり、抱き合って寝るなど大へん仲の良い夫婦です。グリーンエキスポの人気者になることは間違いないでしょう。ぜひご覧ください。11月４日まで、神戸総合運動公園一帯で開かれております。　（谷岡正之）



版画で見る王子動物園（その３）

太陽の動物舎

は虫類・夜行性動物を飼育し、太陽熱利用で温度管理を行うソーラーシステム導入の獣舎、国画会・日本版画協会会員で神戸出身の著名な版画家・川西祐三郎先生にお願いして、王子動物園を版画で描いて頂きました。園内売店で５枚セットにして販売しています。

編集後記

はばたき18号をお届けします。今春は、カバ、カカバ、フラミンゴの他、シフゾウ、タヌキなどのベビーが誕生という明るい話題がありましたが、その反面ベンガルトラの「猛男」が死亡するという悲しい出来事もありました。施設では、62年春オープン予定の動物科学資料館の建設に着工しました。動物園の数々のドラマの中で関係者一同これからも新しいドラマ作りに意欲満々です。　（編集室）

はばたき　第18号
昭和60年７月25日発行
編集：神戸市立王子動物園
TEL.（078）861－5624
発行：神戸王子動物園協会
TEL.（078）801－5711
神戸市灘区王子町３丁目１
印刷：梶原出版印刷合資会社
１部　100円